

— 1 —
次の文章を読んで、あとの設問に答えよ。

最近、週刊誌でよく見かけるタイトルのひとつに、「寝たきりにならない食事特集」というようなものがあります。先日、ある雑誌で対談をしたのですが、その時に手渡された最新号を見ると、「死ぬまで寝たきりにならないための食生活」と大きな文字で書いてありました。「なんで、こんなのやるの」と聞くと、「これをやると売れるんですよ」、「三度目なんですよ」と返事が返ってきました。

雑誌のほうは、「こういうものを食べなさい」、あるいは、「ああいうものは食べてはいけません」と言っているだけなんです。でも、こういうメッセージを出し続けると、それを読んでいる人は何を理解するか。それは、「体は、意識でコントロールできるものである」ということです。

「こうすれば、寝たきりにならない」、というのは、つまり「ああすれば、こうなる」という思考法です。この思考法は強力、強烈で、人の人生をつまらなくし、場合によっては人を不幸にしている原因のひとつです。もし、「ああすれば、こうなる」ですべてがすむなら、世の厄介ことはほとんど解消してしまうでしょう。そして同時に、そういう世界は、生きていてもおもしろくない。

ことは食事だけにとどまらない。手を替え品を替え、「ああすれば、こうなる」式の情報が発信され続けている。それで人々は、「要するに意識的に日常生活をコントロールすれば、寝たきりにならないですむんだな」と了解するわけです。これも、暗黙のうちに形づくられているメタメッセージです。^(*)

はつきり言いますが、このメタメッセージはウソ。それならなんで人は死ぬんだよ、ということです。意識で体がコントロールできるなら、死にたくないと思っている人は死なないですむはずです。

(中略)

健康のためのダイエットやジョギングが流行^{はや}っているようですが、私からすれば、あんなのはみんなウソです。サプリメントも、その効果はあやしいものです。^①都市の生活やそこでの流行は、意識が^(a)つづらなかつたものをみな排除しようとし^{しま}す。脳からすれば、体は「汚れたもの」となり、意識でそれを徹底的に^(a)ソウジユウしようとする。本当に体に関心がある人、体を気遣っている人はどうするか。答えははつきりしていて、体に聞くわけです。意識に聞いたって、仕方ありません。先日のことですが、女子学生に「女性と体」という話をしました。茶道などが典型ですが、どうやったら畳の上で合理的に動けるかを追求してきました。それで、所作の形が決まっていた。所作を身につける稽古を続けていくと、その人の動きが優雅に見えてくる。そういう人の美しい動作は、たとえ大勢の中にまぎれていても目に飛び込んでくるものなのだと話しました。学生たちはおおいに納得しました。

一通り話をして、最後に質問の時間をつくりました。^②予想していた質問が案の定、出たので、ちゃんと褒めてきました。女子学生いわく、「先生は、スタイルがどうだからということできれいに見えるわけではないとおっしゃいました。人が美しく感じるの、動きであり、所作が大切なのだ、と。このことは理解しました。でも、どうしたら、そうできるんですか」。今の人はすぐそう聞く。でも、そんなこと、当人が実際に体を動かして何かをやってみなければわからないじゃないか。

^③ああすればこうなる。だから、ああしてみよう。こういう思考の仕方が習い性になっている。これが間違いのものなのです。あらかじめ、意識から入っていることの証です。

^{(*)2} V・S・ラマチャンドランと^{(*)3} サンドラ・ブレイクスリーによって書かれた『脳のなかの幽霊』(角川文庫)は、^{げんし}幻肢(切断された、ないはずの手足に痛みなどを感じる症状)や半側空間無視(体の半分のあらゆる刺激を認識できなくなる症状)などを観察して、脳の不思議に迫ったものです。ふつうの人が考えている体はまさに幽霊で、実体がないことを明かしました。

近代人は、意識が体に先立つと考えます。そして、体は、意識でコントロールできるものだ結論しています。そこから出てくるのは、自分の体は自分が動かしているのであって、間違っても、勝手に動いているわけではないという考え方です。

でも真実は、意識は部分、体が全体なのです。一生の時間を考えれば、何かを意識している時間のほうが少ないはずで、それに対して、体は四六時中いつも存在しています。それを納得できない人は、歩いてみることです。歩こうと思って意識して歩いたら、ふつうに歩くことはできないはずで、足がもつれるかもしれません。意識が体を動かしていると言っても、最初に歩こうと思っただけにすぎないのです。

ここでも、こう言う人が出てきます。「では、体が意識から解放されるためには、どうしたらいいんですか」と。そうではないのです。気がつかなくてはいけないのは、体のことをわかっているつもりでいるかもしれないけれども、それが幻想だということ。このことが理解できれば、あすればこうなる式に体を支配しようとはしないはずで。

ただ、こう言うと、今の人は不安で仕方がないはずで、「自分」だと思っていたものが、じつはそれは正体不明なんだよ、と言われていくことになりますから。

最近アメリカでも、意識は **A** だとする脳科学の本が出版されるようになりました。だまし絵など、二次元空間に描かれているだけなのに立体的に見えてしまう絵がありますが、この現象は、物質としての脳が、その絵を解釈しながら見るためだと考えられています。意識は二次元の平面であることがわかっていて、そう見ようとしても、意識ではない部分が、それを **(b)** ハバミ、立体として見てしまうということです。

間違う人がよくいるのですが、五官に訴える物体としての体と、機能としての体は異なっています。脳は機能として言えば、心です。つまり、「脳」と「心」と言う時には視点が変わっているわけです。脳と言う時には、物質的・感覚的に捉えている。触れば触った感じがするし、匂いをかげば匂いもある。食べれば味があるし、叩けば音がする。見ようと思えば見える……。しかし、心はそうはいきません。まったく見えない。だから、心は概念的であるわけです。

私はよく森に行きなさいと言います。でも、そうすると、たいていは、「森に行くとなんがあるのですか」という質問が返ってきます。私からすると、**④**「そういう質問をするよつだから、だめなんだよ」と言いたくなる。ここまで読んでくださった方には、もうおわかりだと思えます。たとえば、森林浴のためとか言ってしまうと、もうそれ以上のことは経験できません。意識から入っていくと、体験できることが限定されてしまいます。そういう人に限って、行ってみたけれど、たいしたことなかったとか何とか、ぶつぶつ言う。こういう人の人生は貧相だと思えます。あすればこうなる式では、おもしろいわけがない。「生まれたから死にました。以上終わり」、となってしまう。人生はいらぬということになりかねない。

自然はリスクそのものだと言ってもよいと思います。もちろん、都市にも、犯罪や交通事故など、都市ならではの予測できない危険は付きものですが、自然と相対している場合とは **B** のでしょう。ちよつとしたことですべてが変わります。虫捕りは自然の中でしかできないこともあって、賭け事みたいなところがあります。天気がいいかどうかは虫捕りに大きな影響があります。でも、天候を自分で決めることはできません。天気予報やさまざまな情報を利用しますが、そういう準備にも限界があります。

ある時のこと、ブータンに虫捕りに行きました。山からの帰り道、ガイドさんの知り合いのお宅に寄って、お茶を淹れてもらったことがあります。しばらくしておいとましましたが、あと三〇分話が長引いていたら、その後の予定はすべて吹っ飛んでいました。というのは、三〇分後大雨が降って道路が **(c)** スندان^{スندان}されてしまったからです。もしそのタイミングで腰を上げなかったら、一週間は帰れなかったでしょう。

虫捕りひとつとってみても、リスクなんて計算していたら、やっていられません。そう考えていくと、人生はロシアン・ルーレットみたいなものであって、ことあらためて賭け事をする必要はないことになります。だから、ぼくは賭け事をしません。

だから、本当は森じゃなくてもいい。川、海、空、あるいは自分の体と、入り口はどこでもいいのです。その人に訴えるものはそれぞれ違ってきます。ほかの場合、森に関心をもち始めたのは、虫からでした。虫と森は切っても切れない関係にあります。自然には、どこから入ってもよく、すべてがつながっています。^⑤富士山は、どこから登っても頂上は同じです。自分の体に関心をもつ人は、自然にも関心をもつようになるはずなのです。

〔注〕

〔一〕の文章の出典は、養老孟司『養老孟司の幸福論 まち、ときどき森』です。

*1 メタメッセージ……記事、広告、宣伝などを見た人が読み取る、直接には表現されていないメッセージや表面に現れている意味以上のメッセージのこと。

*2 V・S・ラマチャンドラン……カリフォルニア大学サンティエゴ校の脳認知センター教授および所長。神経科学者。

*3 サンドラ・ブレイクスリー……NYタイムズなどに寄稿する著名なサイエンス・ライター。

問一 〓部(a) (c) のカタカナを漢字に直しなさい。

問二

A

B

に入る語として最も適当なものを選びなさい。

- | | | | | | | | | |
|---|---|---------------------------|---|---------|---|-------|---|---------------------------|
| A | ア | 砂上の楼閣 <small>ろうかく</small> | イ | 机上の空論 | ウ | 氷山の一角 | エ | 青天の霹靂 <small>へきれき</small> |
| B | ア | 五十歩百歩な | イ | 雲泥の差がある | ウ | 紙一重な | エ | 馬が合う |

問三 〓部①「都市の生活やそこでの流行は、意識がつくらなかったものをみな排除しよう」とあるが、その具体例として適当でないものを一つ選びなさい。

- ア 農家から無農薬で栽培された米や野菜を取り寄せて食べる。
- イ トレーニングジムに通い、体を鍛えて、均整のとれた体にする。
- ウ 空き地を大きな公園にして、樹木を植え、池や遊具を作る。
- エ 部屋に空気清浄機を設置し、除菌効果の高い洗剤で洗濯する。
- オ クラス替えて、席が隣になった女の子に恋をして、告白する。

問四 — 部②「予想していた質問が案の定、出たので、ちゃんと褒めてきました」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを選びなさい。

ア 筆者は、畳の上での合理的な動き方を追求し稽古した人の動きは美しく見えるという話を女子学生にしたが、そのような話をすると、現代の女子学生が必ず、どうすれば自分も美しく見られるのかということを質問することを承知しており、自己のスタイルや内面を磨く前に美しく見える動作を教えてもらおうとすることに対して、皮肉の念を込める意味で「褒めてきた」と言っている。

イ 筆者は、畳の上での合理的な動き方を追求し稽古した人の動きは美しく見えるという話を女子学生にしたが、そのような話をする、現代人が必ず、そのように美しく見える動きを身につける方法を知りたがるということを承知しており、自分の話の本質を理解できていないが故に生じる質問を、想定通り行ってきたことに対して、皮肉の念を込める意味で「褒めてきた」と言っている。

ウ 筆者は、茶道などでは畳の上で合理的に動く方法を追求するのであり、その動きを稽古して身につけた人の動きが優雅に見えてくるという話を女子学生にしたが、現代の学生は茶道などに触れる機会が少ないため、茶道の動きを身につける方法を質問してくることが多く、この時も、自分の想定通り同様の質問が出たため満足し、いい質問であるという意味で「褒めてきた」と言っている。

エ 筆者は、茶道などでは畳の上で合理的に動く方法を追求するのであり、その稽古によって作られるスタイルこそ美しいという話をしたのに、女子学生は、どのようにしたらそうした動きが身につくのかという質問をしてきたため、自分が一度説明したことと同じことを説明させるような質問しかできない女子学生に対して皮肉の念を込める意味で「褒めてきた」と言っている。

オ 筆者は、茶道などで、畳の上で合理的に動くためには、誰しもまず動作を試行錯誤しながら合理的な所作を発見していかなければならないという話をしたのに、頭で理解するのではなく実際に体を動かすことが重要であるという話の根本を理解せず、美しい動きを行う方法を女子学生が質問したため、予想どおり程度の低い質問が出たことに満足して、「褒めてきた」と言っている。

問五 — 部③「ああすればこうなる。だから、ああしてみよう。こういう思考の仕方が習い性になっている。これが間違いのものなのです」とあるが、なぜ筆者は「ああすればこうなる。だから、ああしてみよう」という「思考の仕方」が「間違いのもの」とだと述べているのか。その理由を、傍線部のあとから、3ページの終わりまでの内容を踏まえて、説明しなさい。

問六 ――部④「そういう質問をするようだから、だめなんだよ」とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを
選びなさい。

ア 森に行きなさいという筆者の主張は、目的や意味を求めて森に行くのではなく、自然という人間の意識とは無関係に存在するものに触れ、予期できない体験をすること、「ああすればこうなる式」ではない思考へのまなざしを獲得させようとするものであるのに、それを理解せず、森に行く目的や意味を求めようとして「森に行くと何があるのですか」と質問してしまう現代人の思考を批判しているということ。

イ 森に行きなさいという筆者の主張は、自身も虫捕りを趣味としている筆者からの、身体に良い影響を与えるための助言であるが、森は自然であり、自然とは人間の意識でつくったものではなく、人間がリスクをコントロールできないものであるため、現代人がそのリスクを計算し、リスクに見あうだけのメリットを求めて「森に行くと何があるのですか」と質問してしまうことを、残念に思っているということ。

ウ 森に行きなさいという筆者の主張は、人間の意識でどうにかできるものではないリスクのある自然の中で、何が起るかわからない面白さを体験したほうが良いという助言であるが、それに対して、自然よりも面白いものが多くある環境に暮らすことに慣れてしまっているために「森に行くと何があるのですか」というふうを考え、準備された面白さしか享受しようとしないう現代人の在り方を嘆いているということ。

エ 森に行きなさいという筆者の主張は「ああすればこうなる式」ではない思考へのまなざしを獲得させようとする助言だが、それに対し「森に行くと何があるのですか」と問うことは、人間の意識ですべての因果関係を理解しようとすることにほかならず、そうした思考法は、現代ではすでに通用しないものであるため、現代人は自らの頭で理論的に考えて行動することができないと批判しているということ。

オ 森に行きなさいという筆者の主張は「ああすればこうなる式」ではない思考へのまなざしを獲得させようとする助言だが、現代人は、森といえは森林浴のために行くのであるというふうを意識から入って考えてしまい、実際に行ってみて何があるのかを見たり、予期しない出来事を体験したりすべきだということが理解できず、筆者が説明しても間違った質問をするので、筆者は怒りをあらわにしているということ。

問七 ――部⑤「富士山は、どこから登っても頂上は同じです」とあるが、これはどのようなことを表す比喻か。本文の言葉を用いて具体的に説明しなさい。

二

次の文章は芥川龍之介「死後」の全文である。これを読んで、後の問いに答えなさい。

……僕は^(a)床へはいつても、何か本を読まないと、寝つかれない習慣を持つている。のみならずいくら本を読んでも、寝つかれないことさえ稀^{まれ}ではない。こう言う僕の枕もとにはいつも読書用の電燈^{でんとう}だの^(*)アダリン錠^{びん}だのが並んでいる。その晩も僕はふだんのように本を二、三冊^(*)蚊帳の中へ持ちこみ、枕もとの電燈を明るくした。

「何時？」

これはとうに一寝入りした、隣の床にいる妻の声だった。妻は赤児に腕枕をさせ、ま横にこちらを眺めていた。

「三時だ。」

「もう三時。あたし、まだ一時頃かと思っていた。」

僕は好い加減な返事をしたきり、何ともその言葉に取り合わなかった。

「うるさい。うるさい。黙って寝ろ。」

①妻は僕の口真似をしながら、小声にくすくす笑っていた。が、暫^{しばらく}くたつたと思うと、赤子の頭に鼻を押しつけ、いつかもう静かに寝入っていた。

僕はそちらを向いたまま、説教因縁除睡鈔^(*)と言う本を読んでいた。これは和漢天竺^{わかんてんじく}の話^{きやうぼう}を享保頃の坊さんの集めた八巻ものの随筆である。しかし面白い話は勿論、珍らしい話も滅多にない。僕は君臣、父母、夫婦と五倫部^(*)の話を読んでいるうちにそろそろ睡気を感じ出した。それから枕もとの電燈を消し、じきに眠りに落ちてしまった。

夢の中の僕は暑苦しい町をSと一しよに歩いていった。砂利を敷いた歩道の幅はやっと一間か九尺しかなかった。それへまたどの家も同じようにカアキイ色の日除けを張り出していた。

「君が死ぬとは思わなかった。」

Sは扇を使いながら、こう僕に話しかけた。②「一応は気の毒に思っているても、その気もちを露骨に表わすことは嫌っているらしい話しぶりだった。」

「君は長生きをしそうだったがね。」

「そうかしら？」

「僕等はみんなそう言っていたよ。ええと、僕より五つ下だね」とSは指を折って見て、「三十四か？ 三十四くらいで死んだんじゃ、」——それきり急に黙ってしまった。

僕は格別死んだことを残念に思っていないかった。しかし何かSの手前へも羞^{はず}かしいようには感じていた。

「仕事もやりかけていたんだろう？」

Sはもう一度遠慮勝^がちに言った。

「うん、長いものを少し書きかけていた。」

「細君^(*)は？」

「達者だ。子供もこの頃は病気をしない。」

「そりゃまあ何よりだね。僕なんぞもいつ死ぬかわからないが、……」

僕はちよつとSの顔を眺めた。SはやはりS自身は死なずに僕の死んだことを喜んでいる、——それをはっきり感じたのだった。するとSもその瞬間に僕の気もちを感じたと見え、厭^{いや}な顔をして黙ってしまった。

暫く口を利かずに歩いた後、Sは扇に日を除けたまま、大きい缶づめ屋の前に立ち止った。

「じゃ僕は失敬する。」

缶づめ屋の店には薄暗い中に白菊が幾鉢も置いてあった。僕はその店をちらりと見た時、なぜか「ああ、Sの家は青木堂^(*)の支店だった」と思った。

「君は今お父さんと一しょにいるの？」

「ああ、この間から。」

「じゃまた。」

僕はSに別れてから、すぐにその次の横町を曲った。横町の角の飾り窓にはオルガンが一台据えてあった。オルガンは内部の見えるように側面の板だけはずしてあり、そのまた内部には青竹の筒が何本も竝に並んでいた。僕はこれを見た時にも、「成程、竹筒でも好い筈だ」と思った。それから——いつか僕の家の門の前に佇んでいた。

古いくぐり門や黒塀は少しもふだんに変らなかつた。いや、門の上の葉桜の枝さえきのう見た時の通りだった。が、新しい標札には「櫛部寓」と書いてあった。僕はこの標札を眺めた時、ほんとうに僕の死んだことを感じた。けれども門をはいることは勿論、玄関から奥へはいることも全然不徳義とは感じなかつた。

妻は茶の間の椽側に坐り、竹の皮の鎧を拵えていた。妻のいまわりはその為に乾反った竹の皮だらけだった。しかし膝の上ののせた鎧はまだ草摺りが一枚と胴としか出来上つていなかった。

「子供は？」と僕は坐るなり尋ねた。

「きのう伯母さんやおばあさんとみんな鵠沼へやりました。」

「おじいさんは？」

「おじいさんは銀行へいらしたんでしよう。」

「じゃ誰もいないのかい？」

「ええ、あたしと静やだけ。」

妻は下を向いたまま、竹の皮に針を透していた。しかし僕はその声に忽ち妻の讒を感じ、少し声を荒らげて言った。

「だって櫛部寓って標札が出ているじゃないか？」

妻は驚いたように僕の顔を見上げた。その目はいつも叱られる時にする、途方に暮れた表情をしていた。

「出ているだろう？」

「ええ。」

「じゃその人はいるんだね？」

「ええ。」

妻はすっかり悄気てしまい、竹の皮の鎧ばかりいじっていた。

「そりやいてもかまわないさ。俺はもう死んでいるんだし、——」

③ 僕は半ば僕自身を説得するようにつづけた。

「お前だってまだ若いんだし、そんなことは兎や角言いはしない。唯その人さえちゃんとしていれば、……」

妻はもう一度僕の顔を見上げた。僕はその顔を眺めた時、とり返しのかぬことの出来たのを感じた。同時にまた僕自身の顔色も見る見る血の氣を失ったのを感じた。

「ちゃんとした人じゃないんだね？」

「あたしは悪い人とは思いませんけれど、……」

しかし妻自身も櫛部某に尊敬を持つていないことははっきり僕にわかつていた。ではなぜそう言うものと結婚したか？ それはまだ許せるとしても、妻は櫛部某の卑しい所に反って気安さを見出している、——僕はそこに肚の底から不快に思わずにはいられぬものを感じた。

「子供に父と言わせられる人か？」

「そんなことを言つたって、……」

「駄目だ、いくら弁解しても。」

妻は僕の怒鳴るよりも前にもう袂に顔を隠し、ぶるぶる肩を震わせていた。

「何と言う莫迦だ！ それじゃ死んだって死に切れるものか。」

僕はじつとしてはいられない気になり、あとも見ずに書斎へはいつて行つた。すると書斎の鴨居の上に鳶口が一桎かかっていた。鳶口は柄を黒と朱との漆に巻き立てであるものだった。誰かこれを持っていたことがある、——僕はそんなことを思い出しながら、いつか書斎でも何でもない、枳殻垣に沿つた道を歩いていた。

道はもう暮れかかっていた。のみならず道に敷いた石炭殻も霧雨か露かに濡れ透っていた。僕はまだ余憤を感じたまま、出来るだけ足早に歩いて行つた。が、いくら歩いて行つても、枳殻垣はやはり僕の行手に長ながとつづいているばかりだった。

僕はおのずから目を覚ました。妻や赤子は不相変静かに寝入っているらしかった。けれども夜はもう白みかけたと見え、妙にしんみりした蟬の聲がどこか遠い木に澄み渡っていた。僕はその声を聞きながら、あした（実はきょう）頭の疲れるのを惧れ、もう一度早く眠ろうとした。が、容易に眠られないばかりか、はつきり今の夢を思い出した。夢の中の妻は気の毒にもうまらない役まわりを勤めている。Sは実際でもあかかも知れない。僕も、——^④僕は妻に対しては恐しい利己主義者になっている。殊に僕自身を夢の中の僕と同一人格と考えれば、一層恐しい利己主義者になっている。しかも僕自身は夢の中の僕と必しも同じでないことはない。フロイドは——僕は一つには睡眠を得る為に、また一つには^⑤病的に良心の昂進するのを避ける為に○五瓦のアダリン錠を嚥み、昏々とした眠りに沈んでしまった……………。

（出題の都合により一部表現を改めた。）

《注》

*1 アダリン錠……睡眠薬の名称。

*2 蚊帳……蚊を防ぐために、布団の上に全体を覆うようにしてつるす網状のとばり。

*3 説教因縁除睡鈔……一七二一（享保六）年京都淨円寺住職が著した。日本、中国、インドの面白い因縁話を集めた随筆集。

*4 五倫部……五倫とは、儒教で守るべきとされた五つの倫理。父子の親、君臣の義、夫婦の別、長幼の序、朋友の信。

*5 細君……妻のこと。

*6 青木堂……東京大学正門前にあつた洋酒屋。

*7 草摺り……よろいの胴の下に垂らし、下腹部や太ももの部分を保護するもの。

*8 鴨居……引き戸やふすまを立てるための溝のある横木のうち、上方の部分。

*9 鳶口……棒の先端に、とびのくちばし形の鉄製の鉤（かぎ）を付けた、ものを引き寄せるための道具。

*10 枳殻……ミカン科の落葉低木。生け垣として用いられた。

*11 うまらない役まわり……割に合わない役の回り合わせ。

*12 フロイド……オーストリアの精神分析医。主著『夢判断』で、抑圧された無意識的願望が象徴化されて夢となると説いた。

問一 〓部(a) 〓(d)の漢字をひらがなに直しなさい。

問二 ……部「おのずから」の意味として適当なものを選びなさい。

ア 自然と イ いつの間にか ウ 急に エ 自分から オ だんだんと

問三 ――部①「妻は僕の口真似をしながら、小声にくすくす笑っていた」とあるが、この小説表現の解釈として最も適当なものを選びなさい。

ア なんの返事もしない夫に腹を立て、このあと言われそうなセリフを先回りして言うことで、愛想のない夫をやり込めたのが快かった。

イ こうしたときに何度も夫に言われたセリフであり、気心の知れた夫婦として夫の気持ちを代弁して先回りしたのがおかしかった。

ウ いつまでも寝られないために不機嫌な夫がうとましく、小心者の夫の神経質さに対してたくみな皮肉を言えたことが痛快だった。

エ 夫が読書に集中していて会話にならないことはいつものことであり、わかっているながら夫に話しかけた自分の愚かさが情けなかった。

オ とつさに面白おかしく夫の真似をすることで、読書に夢中になっていて会話にならない夫の気を引き、会話をつづけたと思った。

問四 ――部②「一応は気の毒に思っている、その気もちを露骨に表わすことは嫌っているらしい話しぶりだった」とあるが、「S」のこの態度の理由となっている二十五字程度の部分を本文中から抜き出し、最初の五字を書きなさい。

問五 ――部③「僕は半ば僕自身を説得するように」とあるが、このときの「僕」の心情を、どのようなことに対しての心情であるかを明確にして説明しなさい。

問六 ――部④「僕は妻に対しては恐しい利己主義者になっている」とあるが、どういうことか。「僕」が妻に対してどう思っているのかを明確にして「利己主義」である意味がわかるように説明しなさい。

問七 ――部⑤「病的に良心の昂進するのを避ける為に」とあるが、どういうことか。説明として最も適当なものを選びなさい。

ア 夢に現れた問題を現実の人間関係と混同することで、親しい人の不誠実を責める意識が高じないようにするために。
イ 夢に現れた問題を考えすぎること、妻への過去の振る舞いを悔いるあまり不眠状態とならないようにするために。
ウ 夢に現れた問題を深刻に捉えすぎること、神経過敏となって妻に当たり散らす状態とならないようにするために。
エ 夢に現れた問題を現実の夫婦問題と考えることで、絶望感に押し潰されて死への願望が増さないようにするために。
オ 夢に現れた問題を深く考えることで、妻への罪悪感から自責の念に駆られて自己嫌悪に陥らないようにするために。

問八 次の①～⑤は、芥川龍之介の代表作の冒頭部分である。作品名の組み合わせとして正しいものを選びなさい。

① 或日あるひのことでございます。お釈迦様は極楽ごくらくの蓮池れんちのふちを、独りでぶらぶらお歩きになっていらつしやいました。池の中に咲いている蓮の花は、みんな玉のようにまっ白で、そのまん中にある金色きんしきの薺ずいからは、何とも言えない好いよ匂においが、絶間たえまなくあたりへ溢あふれて居おりました。

② 或春の日暮です。

唐たうの都洛陽ろくやうの西の門の下に、ほんやり空を仰いでいる、一人の若者がありました。

③ 元慶げんけいの末か、仁和にんなの始はじめにあつた話であらう。どちらにしても時代はさして、この話に大事な役を、勤めていない。読者は唯ただ、平安朝と云う、遠い昔が背景になっていると云う事を、知つてさえいてくれれば、よいのである。——その頃、摂政藤原基経せつしやうげんけいに仕えている侍の中に、某なにかしと云う五位があつた。

④ 堀川の大殿様のような方は、これまでは固もとより、後の世には恐らく二人とはいらつしやいますまい。噂うわさに聞きますと、あの方の御誕生になる前には、大威徳明王だいゐとくみやうおうの御姿が御母君の夢枕にお立ちになったとか申す事でございますが、兎とに角御生れつきから、並々の人間とは御違いになつていたようでございます。

⑤ 或時雨しぐれの降る晩のことです。私を乗せた人力車は、何度也大森界隈かいわいの険しい坂を上つたり下りたりして、やっと竹藪たけぶに囲まれた、小さな西洋館の前に梶棒かじぼうを下しました。もう鼠色のペンキの剝はげかかった、狭苦しい玄関には、車夫の出した提灯ちやうちんの明りで見ると、印度人インドマテイラム・ミスラと日本字で書いた、これだけは新しい、瀬戸物の標札がかかっています。

ア	① ㊦「蜘蛛の糸」	㊢ ㊦「地獄変」	㊣ ㊦「杜子春」	㊤ ㊦「芋粥」	㊥ ㊦「魔術」
イ	① ㊦「杜子春」	㊢ ㊦「蜘蛛の糸」	㊣ ㊦「芋粥」	㊤ ㊦「魔術」	㊥ ㊦「地獄変」
ウ	① ㊦「芋粥」	㊢ ㊦「魔術」	㊣ ㊦「地獄変」	㊤ ㊦「杜子春」	㊥ ㊦「蜘蛛の糸」
エ	① ㊦「蜘蛛の糸」	㊢ ㊦「杜子春」	㊣ ㊦「地獄変」	㊤ ㊦「魔術」	㊥ ㊦「芋粥」
オ	① ㊦「杜子春」	㊢ ㊦「芋粥」	㊣ ㊦「魔術」	㊤ ㊦「地獄変」	㊥ ㊦「蜘蛛の糸」
カ	① ㊦「芋粥」	㊢ ㊦「地獄変」	㊣ ㊦「杜子春」	㊤ ㊦「蜘蛛の糸」	㊥ ㊦「魔術」
キ	① ㊦「蜘蛛の糸」	㊢ ㊦「杜子春」	㊣ ㊦「芋粥」	㊤ ㊦「地獄変」	㊥ ㊦「魔術」
ク	① ㊦「杜子春」	㊢ ㊦「魔術」	㊣ ㊦「蜘蛛の糸」	㊤ ㊦「芋粥」	㊥ ㊦「地獄変」
ケ	① ㊦「芋粥」	㊢ ㊦「蜘蛛の糸」	㊣ ㊦「魔術」	㊤ ㊦「杜子春」	㊥ ㊦「地獄変」

解答は、いい、いいに書くこと。

記号や句読点も一字に数えること。

※欄には記入しないこと。

受験番号		
氏	名	
※		

問	a	
→	b	
	c	

問二

A
B

問三

--

問四

--

問五

問六

問七

問
a
b
c
d

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

補足

一の文章の出典は、養老孟司『養老孟司の幸福論 まち、ときどき森』です。

訂正

9頁、一の問六の選択肢ウの文中に間違いがありました。

誤 何が起こるかわからない面白さを体験したほうが良いという助言であるが、
正 何が起こるかわからない面白さを体験したほうが良いという助言である
が、